

# 脳乱 中学受験

熊谷 博子

東京新聞 夕刊コラム『放射線』（現・『紙つぶて』） 2007年1月29日

「狂乱・脳乱中学受験」とは、3年前、娘が中学受験をした後に、書こうと思った本のタイトルだ。私自身は、自分が小中高と大学付属校で育ち世の中を知らなかったという反省から、子どもは公立校、と決めていた。ただゆとり教育への転換期で、多くの母親同様、不安にかられ受験をすることにした。

2月1日の受験日、校門前には各塾の関係者が何十人と旗を持って並び、生徒達を激励するすごい光景がくり広げられていた。受験も終わり数日後、ほっとした私は“中学受験生の母のサイト”を初めてのぞいてみた。

「第一志望校に落ちて子どもが一晩中吐き続けた」「言っではいけないとわかりながら、お兄ちゃんはいい所へ入ったのにと責め続けている」「私も昔、不合格で布団をかぶって泣いていると母親から、なぜ落ちたんだと蹴られ続けた」「落ちた娘に、恥ずかしくて外を歩けない、一緒に死のう、と言った母親がいる」

母と息子の合体ロボット化が激しいと、警告を発している相談サイトもあった。でも毎夜9時過ぎに塾から帰る息子に、さらに深夜まで週5日勉強させてほしいと、父親から頼まれた家庭教師もいる。自分が“いい大学”へ行けなかった父親のリベンジなのだそうだ。

仕事が忙しく子どもの勉強を手伝えない母親が、罪悪感で塾、家庭教師の他、次々と教材を買い与え、年間300万円使ってしまった話もあった。

私自身も気づいたら、最後の1年間に使った塾代が、高いなあ、と思っていた私立の学費を超えていて愕然とした。自分の脳乱を恥じるとともに、それを作り出す社会のおかしさを何とかせねばと思う。